

# キャリア教育へ〈国語の授業方法からのアプローチ〉

草野 美智子\*

## For Career Education—An Approach from the Methods of Teaching National Language

Michiko Kusano\*

Achieving smooth communication is closely related to each student's proficiency in Japanese. In this study, an approach from the methods of teaching Japanese is introduced concerning the development in the ability of communication and that of building and expanding the relationships with others, making use of a perspective of career education through acquiring the ability of logical thought to state students' own opinions properly and establishing themselves.

キーワード：キャリア教育, 4年次, 国語授業

Keywords: Career education, four grader, japanese lesson

### 1. はじめに

#### 1.1 社会が求めるコミュニケーション能力

1999年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」<sup>(1)</sup>で、キャリア教育という言葉が使用されて以来、学校現場へのキャリア教育が積極的に導入されている。この答申では、キャリア教育を「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」と定義している。さらに2006年11月の文科省内協力者会議作成による「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引」<sup>(2)</sup>では、「自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度」を具体的に身につけるための4つの力のうち、人間関係形成能力（自他の理解能力とコミュニケーション能力）を第一にあげている。特にコミュニケーション能力の低下については、2010年11月にも「子ども・若者の変化については、働くことへの関心・意欲・態度、目的意識、責任感、意志等の未熟さやコミュニケーション能力、対人関係能力、基本的マナー等、職業人としての基本的な能力の低下や職業意識・職業観の未熟さなどが多く指摘されている。」<sup>(3)</sup>と指摘される。つまりキャリア教育は、学校や社会における生徒（学生）の自己肯定感の低さ、集中力や耐性の欠如、学習意欲の低下、そしてコミュニケーション能力の低下などの状況を打開するために各学校で発達段階に応じて多様な工夫を施しながら導入されている。

#### 1.2 国語科におけるコミュニケーション能力育成の現状

国語教育では、円滑な人間関係を築いていくための言語の運用能力、特に話す力・聞く力を十分に育成することで、社会的な諸問題の根底を支えるコミュニケーション能力の育成が不可欠である。しかし、実際の国語指導では音声言語教育（話し方・聞き方）よりも、文字言語（読解力・文章作成力）の教育が重視されてきた。客観的な評価が難しいせいも、音声言語の教育は全体的にみると時間のかけ方が少ない傾向にある。

#### 1.3 研究の目的

本稿では、高等専門学校（以下高専と略称）の国語授業において、学生の社会的自立への内発的動機付けおよび就職・職業選択に資する能力として、特に「話す・聞く」といった音声言語によるコミュニケーション能力の育成に焦点を当てる。言語運用能力育成の考え方、授業内容、授業評価、そして今後の課題について、キャリア教育につながる、国語の授業方法からのアプローチ、つまり今後の国語科に求められる授業改善の視点を実践例を通して提案する。

### 2. 方法

#### 2.1 対象者

対象者は、進路選択を具体的に考える高専4年生とする。実践事例にあげるのは、熊本高専熊本キャンパス4年次に在籍する全学生113名（男子95名、女子18名）である。進路希望の内訳は、進学希望約60%、就職希望約40%の比率である。

#### 2.2 キャリア教育における言語運用能力育成の考え方

キャリア教育の本質は一部の教科や不定期の講演会活動に任されるのではなく、すべての教科と学校活動全体を通

\*共通教育科

〒861-1102 熊本県合志市須屋 2659-2

Faculty of Liberal Studies

2659-2 Suya, Koshi-shi, Kumamoto, 861-1102, Japan

して学生の自立への内発的動機付けを効果的に支援することである。特に大学等におけるキャリア教育の目標は、「社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力」の育成にある<sup>3)</sup>。

図1は、社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力に含まれる要素を示したもので、①基礎的・基本的な知識・技能、②基礎的・汎用的能力、③論理的思考力、④創造力、⑤意欲・態度及び価値観、⑥専門的な知識・技能等があるが、主にキャリア教育で育成すべき能力として想定されるのは包括的な②基礎的・汎用的能力と位置づけられる。

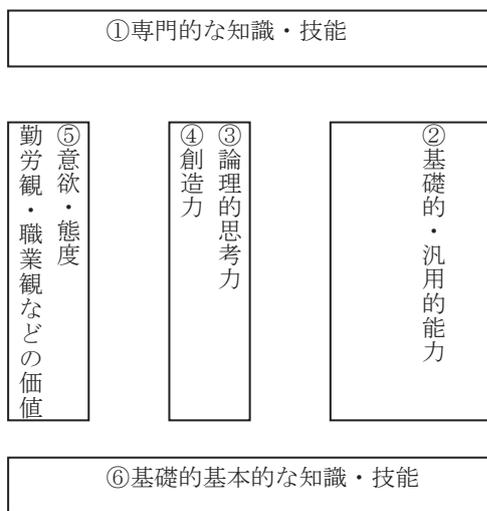


図1 「社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素（中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」をもとに作成）

さらに②基礎的・汎用的能力には、行動として表れ、評価が可能であるという観点から、図2に示す通り、次の4つの能力が設定される。

- ・「キャリアプランニング能力」：自己の職業的な能力・適性を理解し、それを受け入れて伸ばそうとする能力
- ・「課題対応能力」：多様な他者とのチームワークを通して課題を解決していく能力
- ・「自己理解・自己管理能力」：自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力
- ・「人間関係形成・社会形成能力」：他者の個性を尊重し、自分の個性を発揮しながら、人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む能力

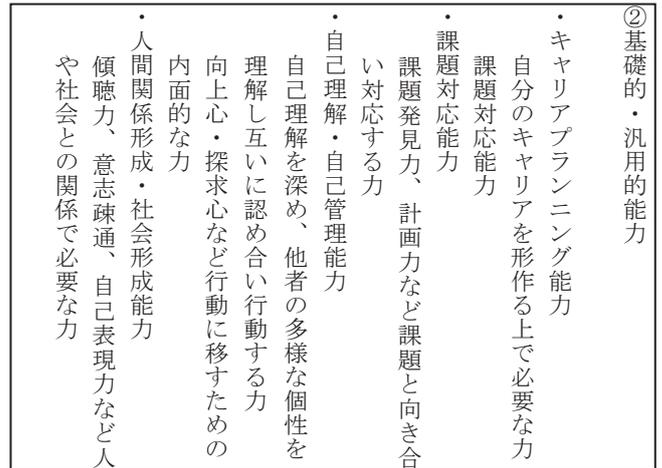


図2 基礎的・汎用的能力の内容（：中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」をもとに作成）

とりわけ人間関係形成・社会形成能力の土台と位置づけられるコミュニケーション能力は、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に、かつ魅力が伝わりやすいように話せる力である。今後の生き方を考え、職業選択に対する目的意識を明確にするとともに、他者とのコミュニケーションを通じて自他を理解しながら社会に参画し、今後の社会を積極的に形成する「生きる力」の基礎である。

昨今は英語力の強化に目が向いて、全ての学力の基礎となる日本語に目が向いていないように思う。まして工学系は、国語学習に対して熱心に取り組む時間は少ない。

したがってキャリア教育に向けて、国語の授業で、日本語によるコミュニケーション能力の育成は「生きる力」の基礎を形成する最も重要なテーマの一つとなる。

### 2.3 授業内容

#### 2.3.1 公開番組～ゲストの話をお聴こう～

「基礎的・汎用的能力」のうち「課題対応能力」「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成能力・社会形成能力」を育成するために、「公開トーク番組～ゲストの話をお聴こう～」を展開した。

2人組でパーソナリティとゲストとなり、パーソナリティが質問をして、ゲストが答えて番組を構築していく。自分の個性を発揮しながら、相手の個性を尊重し、傾聴しながらも次の発言を考えてコミュニケーションを図り、協力・共同して、聴衆を前にした架空の公開トーク番組（10分間）を成立させる課題にいかに対応するかという内容である。

指示した手順は以下の通りである。

- 1) ゲストはトーク番組内で話すテーマを考え、予めパーソナリティに伝えて事前の打ち合わせをしておく。
- 2) パーソナリティ・ゲストともに、板書や show&tell を利用して視覚的な効果を狙う工夫を考えておく。
- 3) 番組が開始されると、パーソナリティは、会場の聴衆に

挨拶をし、テーマを告げ、2人だけの話に終始しないよう注意を払う。

4) インタビューは、一問一答に終わらず、さらに相手の話を掘り下げ、うまく引き出す話し方をする。

5) パーソナリティ・ゲストともに「聞き上手」となり、身振り・声・表情といった非言語メッセージを使いながら傾聴する。

6) パーソナリティは、トーク終了時に、聴衆に、話の要点を、わかりやすく簡潔に、まとめ、次回の予告をする。

7) 1組の終了後に、聴衆の学生は、改善点を含めて、一連のやり取りの感想を述べて、評価する。

### 2.3.2 面接でよくある質問に答える

「基礎的・汎用的能力」のうち「キャリアプランニング能力」「課題対応能力」「自己理解・自己管理能力」を育成するために、「面接でよくある質問に答える」を展開した。

手順は以下の通りである。

1) 教師は、授業中、企業面接でよく問われる質問事項を提示し、質問の意図と回答を考える課題を与える。

2) 学生は、まず質問の意図を考え、発表する。

3) 教師は学生の回答を踏まえて解説を行う。例えば、「仕事にやりがいを感じる時はどんなときか」の質問に対して、面接官は、志願者の仕事に対するモチベーションや指向性を知るために出題している。そのため、今までの高専生活で体感してきた「やりがい」や「喜び」の具体的な体験談を伝える。そして「やりがい」や「喜び」を再現させるために普段からどういう意識を持って、工夫・努力をしているかを伝えるなどの解説である。

4) 学生は、質問の意図を理解し、自己の職業的な能力・適性と関連したエピソードをその場で考える（5分程度）。

5) 学生は、自ら積極的に挙手をして、リーダーシップを発揮したり、時には譲ったりするフォロア・シップを発揮して、人前に出て回答を発表する。指名制とはしない。

### 2.4 授業評価

「公開トーク番組～ゲストの話を聴こう～」の授業実施後のアンケート結果（有効回答 110 名）は、以下の通りである。

- 問 1 主要な打ち合わせの場所  
学校または学寮 (61.1%)  
SNS (メール、Line、ツイッター等) (29.4%)  
その他 (友人宅) (9.5%)

- 問 2 準備時間  
0.5 時間程度 (8.3%)  
1 時間程度 (23.3%)  
2 時間程度 (36.1%)  
3 時間程度 (25.5%)  
4 時間以上 (6.8%)

- 問 3 発表後の変化 (複数解答)  
級友の意外な一面がわかり楽しくなった (85.1%)

人前で緊張したが話すことが面白くなった  
(64.2%)

日常的に自分の言語表現に関する意識が高まった  
(45.0%)

人と話すときに意識的に聞くようになった  
(26.7%)

他人の言葉への注意が増した (22.2%)

うなずきや合いの手の効果がわかった (16.7%)

#### 問 6 発表を聞く態度

大体聞いていた (5.6%)

発表者や内容によって聞いていた (13.3%)

大変注意深く聞いていた (81.1%)

違うことをして聞いていなかった (0%)

#### 問 7 役に立ったか

ある程度役に立った (18.6%)

大変役に立った (81.4%)

あまり役に立たなかった (0%)

ほとんど役に立たなかった (0%)

問 8 問 7 で「大変・ある程度役に立った」のはどんな点であるか。

・「話の流れの大切さ」である。質問の回答からまた新たに質問を生むきれいな流れがあった。話の流れがきれいであると主題からそれることもなく、まとまった話になるため、流れというものは非常に大切だと感じた。

・トークの雰囲気やテンポなどがトーク番組の要素を作り出しているため、常に会場の雰囲気を把握することが重要であることを学んだ。自分の話したい部分とパーソナリティが興味を持つ部分、聴衆が聞きたい部分が一致するという事はほぼないため、そのときの会場の雰囲気に合わせて話の内容を変更することも大切であることを学んだ。

・ゲストの話に相槌を打ちながらしっかり聞いて、聞きながらも質問とか話を膨らませるように考えるのが大変だった。ゲストとパーソナリティが話す量のバランスも大事だ。主役はゲストだが、パーソナリティもただの傍聴者ではないと感じた。

・ゲストはパーソナリティと対話しつつも第三者にも分かるように話すことだ。ただ単にパーソナリティと普通に会話するだけでは聞き手は置いてきぼりになってしまう。そうならないように意識し、説明も交えながら話さなければならず大変だった。

・適度な間を取って話すことだ。適度な間を取ることで、話の流れを理解しやすくなる。今後人前で話す時に参考にしていきたい。

・パーソナリティとしてテーマの情報に疎かった。

あえて疎いことを利用して話を進めようと考えていたが、結果として話についていくことができなかった。事前準備を怠らず相手が話す話題に精通しておきたい。

・テーマがマニアックな分野であり、専門的な用語を多く使いすぎた。場に応じた言葉遣いと、相手への臨機応変な説明や説得の仕方を考えて分かりやすくすべきだった。

- ・自己顕示欲を満たす
- ・意見は批判されず自信が付いた
- ・聞いてくれる環境がよい
- ・自分の発表に対する今後の課題が見つかる
- ・自らの成長にもなり平常点ももらえる一石二鳥

問6 役に立ったか

- ある程度役に立った (1.8%)
- 大変役に立った (98.2%)
- あまり役に立たなかった (0%)
- ほとんど役に立たなかった (0%)

問7 問6で「大変・ある程度役に立った」のはどんな点であるか。

・質問の意図を考えて回答を組み立てることは大事だと分かった。学生と面接官との間でズレが生じて戸惑ってしまわないように、本番前では計画を練って練習しようと思った。

・誰かに聴かせるためのトークは、内容よりも話し方が重要ということを学んだ。聞いているときに楽しく笑い、次の言葉を聴き逃さないようにしようと思った人が何人もいた。逆に内容はいいものであっても話術次第で「つまらない話だ」という印象を与えてしまわないように、面接では「話す」訓練が必要だなと思った。

・自分の考えを1分程度に詰め込み、経験談も交えて話すのはとても難しく、よい練習の場となった。

・質問に対して十分な時間があればまとめられるがそれでは根本的な解決にならないため、日々の生活の中で自分が疑問に思う事柄を整理しておこうようになった。

・国語が苦手だからこそ、先生は話の内容も評価するが、積極性も評価してもらえるよい機会だと考え、積極的に前へ出ることができた。

・話しやすい話題であった。自分の長所や失敗談を語る間では、普段から話し慣れていたものであったが、話すことで自分の中で答えがはっきりして確認できた。

・周りが発表しないと授業が成立しないと思い、クラスの雰囲気や考慮して前に出た。そうしないと勇気をもって挙手した他の人の努力も無駄になると思った。

- ・いよいよ進路を考える時期となったと実感できた
- ・自分の学力や性格でどの企業に付くのがふさわしいのか知りたくなった。

教師による成績評価は以下の通りに行った。

本来キャリア教育とは、心理学の一分野であり、本人が自分のキャリアを考えるきっかけ作りのため、主観的な要

「面接でよくある質問に答える」の授業実施後のアンケート結果(有効回答 109名)は、以下の通りである。

問1 他の面接質問事項も調べたか

はい (19.4%) いいえ (72.2%)

問2 発表を聞く態度

大体聞いていた (8.9%)

大変注意深く聞いていた (91.1%)

発表者や内容によって聞いていた (0%)

違うことをして聞いていなかった (0%)

問3 何度人前で発表したか

0回 12人 (11.0%)

1回 63人 (57.8%)

2回 20人 (18.3%)

3回 11人 (10.1%)

4回以上 3人 (0.3%)

問4 問3で、発表しなかった、または1回しか発表しなかった理由はなにか。

- ・本当にこれでよいのか、的外れではないかと不安
- ・失敗したら恥ずかしい
- ・赤面し、頭は真っ白になる
- ・何を話しているかわからなくなり混乱する
- ・人に見られるのが恥ずかしい
- ・周りの目を気にして、反応が怖い
- ・意見をまとめるのが遅く発表のタイミングを逃す
- ・大勢の男子の前で話すとき萎縮してしまう
- ・話題が少なく(他の質問の回答と)同じ話になる
- ・未発表の人に譲る
- ・他人の意見を聞き入れる訓練と思った
- ・テーマを厳選して様子を見ていた
- ・優等生のやるモノ
- ・浮くのが嫌

問5 問3で、3回以上発表した理由はなにか。

- ・人前で話す苦手意識の克服の場ととらえた
- ・編入試験での面接対応と考えた
- ・回数を競う闘争意識が働いた
- ・自分を知ってもらいたい、意見を伝えたい強い思いがあった

素が多く、相対評価にはなじまない。しかし、行動として表れ、評価が可能であるという観点から、「キャリアプランニング能力」「課題対応能力」「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」の4つの能力が設定され、それに沿って授業を展開した以上、評価は可能となると判断した。

積極的な授業への参加、発表内容の充実ぶりに加えて、学生の相互評価、自己評価を加味して、評価を行った。

学生からのアンケートを見ると、「公開トーク番組～ゲストの話を聴こう～」、「面接でよくある質問に答える」授業もともに、満足度は高く、ほぼ目的は達成できたようである。多くの学生が他者とのコミュニケーション形成について関心や問題意識を持っており、自分と他者に関心を持ち、課題に対して達成意欲をもって表現にまでつなげるといった効果は少なからずあった。学生同士が感想を述べ合うブラッシュアップは積極的になされ、活発な授業となり、言語活動の充実が図れたようである<sup>(4)</sup>。

一方で、「公開トーク番組～ゲストの話を聴こう～」では、内容よりも笑える言動や表情を連発する乗りの良い学生が受けたり、それだけを期待して聞いている学生も散見された。「発表者や内容によって聞いていた(13.3%)」というアンケート結果(問6)はその意識の反映かもしれない。

「面接でよくある質問に答える」の授業では、その場で5分間考え、自発的に回答するやり方をとったため、授業の趣旨が徹底しないまま「誰かが発表するから面倒なこととはしたくない」と漫然と取り組んでいる学生もいた。また、教室で提示された以外の面接質問を自ら調査した学生はアンケート結果(問1)で19.4%にとどまった。

実は、漫然と取り組む学生にこそキャリア教育が最も必要と思われ、積極的に働きかけていく必要があるという課題も出てくる。これらを解決する方策を学生自身に討論させた結果、以下のやり方が挙げられた。

- ・ 次回の授業で扱う「面接での質問事項」を事前に知らせて、予め考えてきてもらう。
- ・ 最低2回は人前での発表をノルマ化する。
- ・ より進路への意識を高くするために4年前期開講授業を、後期に持ってくる

いずれも取り組みやすいやり方なので来年度改善を図る予定である。

また、発表をしながらいない学生には、スタンフォード大学の心理学教授克蘭ボルツのプランドハプンスタンスセオリー(Planned Happenstance Theory)<sup>(5)</sup>を紹介した。これは、キャリアはプランドハプンスタンス(計画された偶発性)が決めるもので偶然が支配するが、個人の行動によって「良い偶然」をまるで計画されたようにもたらすことができるという考え方である。前もって「間違いのない、効

率的なキャリア」を知る方法はなく、さまざまな活動を試してみることによって見つけられるものである<sup>(6)</sup>。だから発表にしてもやり方はバリエーションに富み、正解は何通りもある。かたくなにできないと決めつけずに、「とりあえずやってみる」「チャレンジを生かしてみる」姿勢の大切さを説いた。

### 3. 今後の課題

今後、本研究の課題は、4年生で実施した音声言語教育によるキャリア教育を、低学年から構築することに求められる。「話す技術」「聞く技術」の能力を育成するため、低学年の国語授業の中に計画的に適切に組み入れることである。

低学年では比較的、文字言語能力の育成(読解力、文章作成力)を重視してきた。そこで、特に、「キャリアプランニング能力」「課題対応能力」「自己理解・自己管理能力」「人間関係形成・社会形成能力」の4つの能力を描いた小説や評論文、韻文を教材化し、文字言語教育として扱うことにより、文字言語と音声言語の指導をバランス良く行うことができるのではないかと考える。むしろ、人間や社会の姿を描いた小説や評論文、韻文である以上、テーマをとらえる際には、4つの能力に包括的に収斂していくものと考えられる。

さらにキャリア教育は、学生の自立への内面的な動機付け・きっかけ作りが最も大きな目的である。そのためには、グループ学習など、アクティブラーニングを取り入れた授業が効果的である。全教員が理想ではあるが、まずは国語教師自ら、臨床心理学の知見を学び、カウンセリングやコーチングのスキルを用いて、学生に自己および他者理解や自己主張のなど、キャリア形成支援を行うことも求められるであろう。

### 4. まとめ

以上、4年生で実施した国語授業におけるキャリア教育へのアプローチを報告した。

もちろん、報告した授業以外にも、音声言語教育が一過性に終わらないように、スピーチや集団討論を実践している。同時に、授業のまとめを書く200字作文や、「私の強み」「求められる技術者とは」などの課題文、寓話の読解など文字言語能力の育成にも力を入れ、バランスはとっている。

上記の新しい国語教育のあり方の提案を通して、高専における音声言語教育の指導のあり方を中心にした新たな視点でのキャリア教育の提案としたい。

(平成27年9月25日受付)

(平成27年11月25日受理)

参考文献

(1) 知恵蔵 2015 の解説.

青少年の進路指導に関わる新しい教育概念。1970 年代初めに当時の米国連邦教育局長官マーランドが **career education** という言葉で提唱した。中央教育審議会(中教審)が 99 年に、「学校教育と職業生活との円滑な接続を図るため、望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせると共に、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」として提言し、政策的に推進されることとなった。概念としては進路指導と基本的違いはないが、文部科学省内に設けられたキャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議が 2004 年 1 月に発表した報告書によると、「従来の進路指導に比べてより広範な活動」を展開すること、また、専門的な知識・技能の習得に重点を置いた従来の職業教育を反省して、働くことや専門的知識・技能の習得の意義を理解させることが狙いとされ、小学校から始めることとされている。( 新井郁男 上越教育大学名誉教授/2007 年)

<http://kotobank.jp/word/%E3%82%AD%E3%83%A3%E3%83%AA%E3%82%A2%E6%95%99%E8%82%B2>

(2015.9.6 閲覧)

(2) 小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引  
<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/21career.shiryu/honbun/koumoku/1-05.pdf> (2015.9.20 閲覧)

(3) 「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」について～「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (平成 23 年 1 月中央教育審議会答申)」における提言～

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/\\_icsFiles/afieldfile/2012/09/12/1325670\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryu/_icsFiles/afieldfile/2012/09/12/1325670_02.pdf)

(2015.9.20 閲覧)

(4) 「公開トーク番組～ゲストの話を聴こう～」、「面接でよくある質問に答える」授業風景は、教員のインタビューとともに、「授業支援スキル向上支援ツールの ICT 共有」(JSPS 科研費 23531035 助成事業)によって、web 配信ビデオ動画となっている。

01 授業風景

<https://drive.google.com/file/d/0BzIG4CXaptDZZ2hoYWcxajFURjg/view?usp=sharing>

インタビューで述べられている手法と対応付けて、右上に授業の流れの中の、どの部分なのかを表示。授業中に発揮されている、「スキル」や「こだわりポイント」を解説付きで下に表示。

02 インタビュー (概要と手法)

<https://drive.google.com/file/d/0BzIG4CXaptDZLUhXaGN5MnhfUkE/view?usp=sharing>

適宜、ポイントをテロップ表示。

03 インタビュー (活性化の工夫)

<https://drive.google.com/file/d/0BzIG4CXaptDZaEV6RGdac3N5enM/view?usp=sharing>

04 インタビュー (効果と課題)

<https://drive.google.com/file/d/0BzIG4CXaptDZb3hsQnZLak5PUTQ/view?usp=sharing>

(5) John D. Krumboltz (原著)、Al S. Levin (原著)、花田光世(翻訳)、大木紀子 (翻訳)、宮地夕紀子 (翻訳):「その幸運は偶然ではないんです!」ダイヤモンド社 (2005)